

ヒュームはなぜ T 1.4.7 で「全面的懐疑論」に陥ったのか

高萩 智也 (慶應義塾大学)

本発表の目的は、デイヴィッド・ヒューム (David Hume 1711-1776) の『人間本性論』第一巻第四部第七節「この巻の結論」(以下「結論」)を解釈することである。とりわけ、「なぜヒュームは全面的懐疑論に陥ったのか」という問題を中心に論じる。

ヒュームの理論哲学は『人間本性論』の出版以来伝統的に、懐疑主義として解釈されてきた。しかし 20 世紀の後半に自然主義解釈が勢いを増し、現在では定説となりつつある。こうした研究史はヒューム研究者にとって周知の事実と思われる。そして「結論」がこの二大解釈の両者にとって重要なテキスト根拠となってきたこともまた、広く知られていることである。

というのもまず懐疑論解釈に関して言えば、ヒュームは「結論」において、「すべての信念と推論」を完全に拒絶する「全面的懐疑論 (total scepticism)」に陥ったと告白し、その上で、この全面的懐疑論は理性によっては論駁できないと認めるからである。懐疑論解釈はこれを根拠として、その妥当性を主張してきた。

他方で自然主義解釈に関して言えば、ヒュームは確かに「結論」で全面的懐疑論を論駁できないことを認めつつも、人間の自然本性がそれを「一掃して」くれる、と述べている。全面的懐疑論は事実として信じられなくなるというわけだ。さらに D. ギャレットの「資格原理 (title principle)」を基盤とした解釈 (Garrett 1997) に代表されるように、ヒュームは全面的懐疑論に陥る以前に所持していた信念を再び持つことが正当化されると考えた、という議論を展開するものもある。

このように懐疑主義、自然主義のいずれの解釈をとるにしても、「結論」は重要なテキストというわけである—また近年では澤田 (2021) のように、ヒュームを自然主義者でありかつ懐疑主義者だとする解釈もあるが、そこでもやはり「結論」は重要な位置を占めている。

発表者のみるところ、以上のような解釈論争は、ヒュームが全面的懐疑論を受け入れたのか、あるいは乗り越えたのか、乗り越えたのだとすればどのようにしてか、という問いが中心にあった。しかしそれとは別に、そもそもヒュームはなぜ全面的懐疑論に陥ったのか、ということが問われるべきである。というのも彼は自分が全面的懐疑論に陥った状態を「憂鬱とせん妄 (melancholy and delirium)」と表現し、ある種の病的な状態にあると自らを診断するからである。病気が治療されそこから回復するためには、病気の原因が明らかにされ、それが取り除かれる必要がある。

懐疑主義解釈においても自然主義解釈においても、従来「結論」における全面的懐疑論の原因は、全面的懐疑論の主体—つまりここで言えばヒューム自身—の心のうち、つまり主体の内的要因にあると考えられてきた。ギャレットの資格原理を基盤とした解釈を例にとれば、全面的懐疑論は理性が私たちに対して作用する資格のないときに導き出した結論に従ってしまうことで生じる“病気”というわけだ。

本発表はこうした解釈に反して、「結論」における全面的懐疑論という“病気”は「孤独」という認識主体のおかれた環境、つまり主体にとって外的な要因からくるものであると論じる。なぜなら、第一に、もし主体の理性や想像力、そしてそれらの能力に対する反省が全面的懐疑論の原因であったならば、ヒュームは少なくとも「理性に関する懐疑論について」の箇所でも同様に全面的懐

疑論に陥ったに違いないからである。彼はそこでも全面的懐疑論を導いたのと同じような仕方で理性に対して懐疑をむけていたはずだ。

第二に、ヒュームは実際「結論」の冒頭部分において、自分が孤独な状態に置かれており、それゆえに惨めな状態にあると嘆き悲しんでいるからである。彼は『人間本性論』第二巻、情念論のうちで次のように、孤独という状態が病的なまでに情念の働きを歪めてしまうさまを描いている。

完全な孤独はおそらく私たちが被りうる最大の罰である。仲間から離れてはどんな快もしおれて、あらゆる苦が残酷で耐え難いものとなる。(中略)あらゆる自然の力と要素とが、ある人の思うがままになったとしてみよう。彼の命じるままに太陽はのぼり、そして沈む、と。海と川は彼の好むがままに流れ、大地はおのずから、彼にとって有用で快いものを育む。しかしそうだとしても、彼の幸福を分かち合い、その敬意と友情を彼が受け取ることができるような人を少なくとも一人彼が持たなければ、彼はやはり惨めだろう (T 2.2.5.15)

つまり孤独という状態は、人を「憂鬱とせん妄」に陥らせる原因となりうるのだ。

このことから、全面的懐疑論は、孤独から脱することによって初めて治療される、と分かる。例えば萬屋 (2018) は、社交と会話への参加が全面的懐疑論の克服にとって重要な要素であることを既に指摘している (cf. chap.6)。しかし萬屋の解釈では、なぜ全面的懐疑論がこと社交と会話によって治療されなければいけないのかを十分に説明しきれていない。萬屋は「とらわれず気にしないこと」がその治療になり、それには社交と会話しかない」と主張するが、もし単に「とらわれず気にしない」ことが治療になるなら、ひとりで散歩をしたり楽器を演奏したりすることもまた治療になるはずだからである。本発表が提示する解釈はこの難点を逃れている。なぜなら、孤独から脱するためには他者の存在が不可欠であり、それを満たすことができるのは社交と会話のみだからである。

【参考文献】

- Garrett, D. (1997), *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.
- Hume, D. [1739-40] (2007), *A Treatise of Human Nature*, 2 vols., Norton, David F. & Norton, Mary J. (eds.), Oxford: Oxford University Press.
- , [1748]1999, *An Enquiry concerning Human Understanding*, T.L. Beauchamp (ed), Oxford: Oxford University Press.
- 澤田和範. (2021), 『ヒュームの自然主義と懐疑主義 統合的解釈の試み』, 勁草書房.
- 萬屋博喜. (2018), 『ヒューム 因果と自然』, 勁草書房.